

講座 2

坂の上のこどものたまり場

片山健太 自然と暮らしの学校「てつなぐ」

自由に自分を表現できる場「かつちえて」

私は2013年に「てつなぐ」という団体を、パートナーのかおるこさんと始めました。「てつなぐ」はどんな団体かという、ありのままの自分でいられるとか、失敗しても大丈夫なんだとか、自分の人生は自分で決めてもいいんだというように、そういう安心感を得られるような居場所(たまり場)づくりを行っています。もっと言うなら、本来の自分を表現できる場や、自分らしきを取り戻す場づくりです。

活動拠点は、長崎県長崎市の市街地から徒歩10分のところにある自宅を開放して活動を行っ



【図1】子どものたまり場「かつちえて」入口看板



片山健太(かたやまけんた) 写真家

自然と暮らしの学校「てつなぐ」代表

1981年長崎県生まれ。1999年長崎大学工学部卒業。大学院を休学し、2004年にNPO法人フリーウッド自然体験教育センターでこどもの山村留学スタッフに。2010年長崎市内の私立養護施設「2013年自然と暮らしの学校「てつなぐ」をパートナーの佐藤薫子(片山薫子)とともに設立。拠点となる自民家の改修工事からこどもたちと居場所づくりを始め。住み慣れをしながら、無料・申請不要・プログラムなしのたまり場「からちえて」を開発。2018年活動を休止し、2か所目の拠点を長崎市に作るが、2020年冬に、ももとの古民家にて活動を再開予定。写真家パートナーのかおるこ(片山薫子)

ています。長崎は坂の街で、斜面地に家が張り付いているみたいなのですが、「てつなぐ」は階段を130段登つたところにあります。長崎ではこういう場所を坂段(さかだん)というのですが、坂段には車が通らないので、こどもたちが遊ぶには好都合なのです。近隣には小学校が二つ、少し離れて中学校が一つ、高校と専門学校の通学路に面した立地です。近くに、スナックや飲屋街があるので、うちにきているこどもたちの親で水商売されている方もいます。「親が夜中まで帰ってこないで帰ってくるまで頑張つて起きているんだけど、眠くて寝ちゃうんだよね。悲しいよね」という会話をときどき耳にします。僕自身も、実家は長崎の思案橋飲屋街にあるスナックをやっている両親に育てられました。この地域は、片親や貧困家庭が多い地域で、活動を始めるようになって学校や地域の方と色々な話をしていると、約半数の方がいろんな困りごとを抱えているということが話題にあります。

僕たち「てつなぐ」で運営しているのが、こどものたまり場、大人のはなす場「かつちえて」です(図1)。「かつちえて」というのは、長崎弁で

「仲間に入れて!」というような意味です。昔は路地で遊んでいる誰かを見つけて「かつちえて!」と言って遊びに誘っていたわけですね。それがいまはなかなか見られなくなつたので、この家にきたら誰かいるかな、と楽しみに来てもらえたらなと名付けました。こどもたちには、「ここはみんなの溜まり場、自由に過ごしていいんだよ。開いている時間なら好きな時間に来ていいし、いつ帰つてもいいよ」と言っています。

「かつちえて」はこどもの生活圏にあるので、車やバスを使わなくても歩いて来れます。参加費無料、申込み不要です。お金が必要だと、親がダメといつたら行けないので、こどもが自分で決めて自由に来れるようにしています。それから、年齢制限もありません。0歳から200歳まで来ていいよというふうになっています。障害の有無も問わないし、登校不登校も問いません。誰でも来て良いのです。ここは、イベントなし、プログラムなし、タイムスケジュールなし、自分が居たいように過ごせる場所です。いつ来ても、いつ帰つてもいいし、遊ぶのも、遊ば

ないのも自由です。親から「遊んでおいで!」と送り出されたりすることがあると思いますが、大人がこうして欲しいというあり方でなく、いいよ、そういう居場所であつて欲しいなと思つています。2015年に「かつちえて」を開いてから1年後くらいの、とある一日の様子をパートナーのかおるこが書いてくれたので、それを紹介したいと思います(下記文章参照)。



【図2】「かつちえて」で自由に遊ぶ子どもたち

活動の背景と想い

「てつなぐ」の活動は、僕とパートナーのいろいろな考えが重なつたことから始まりました。僕のストーリーでいうと、僕は長野県の山村留学のNPOで働いていました。ここは、親もと離れたこどもたちが、自分たちでやることを話し合つて、長野の山奥で好きなように一年間過ごすという場所です。さまざまなこどもの挑戦を支える大人がいて、こどもの良さやダメな部分もありのままを受け入れてくれて、かけがえのない一年が過ごせる場所です。ちなみに、僕とパートナーのかおるこはこの元同僚で、大人でも大事な価値観をもらえるような、すごくいい経験ができる場所でした。

だけど、僕はずっとシレンマを抱えていたんです。ここは、教育費が年間130万円くらいかかるのですが、こういう場所に来れるチャンスがある子は経済的に恵まれていて、親の理解があります。あなたは勉強だけしとけばいい、

「かつちえて」のとある一日 かおるこ著

「ただいま、やっほー、来たよ。あー暑い、麦茶もらおうね。」

平日の放課後、続々とこどもたちが集まってくる。今日あった出来事や、あれこれこれこれ(山田兵吾)や私(かおるこ)に話し始める子、ピアノを弾く子、宿題を始める子、べっこやホットケーキを作る子。泥遊びや水遊びをする子。漫画を読んだりゲームをする子。七輪に火を起こしてマッシュルームを焼く子。僕は、みんなの横で梅の葉のヘタと、隣で一緒にやります子もいた。それぞれ思い思いの自由を過ごす。かつちえてのいつもの風景だ。

この日は中学生が二人、「今日は動話がないから遊びに来たよ」とやって来た。玄園の方からは、「かおるこちゃん誰か来たよ」というので行ってみると、梅の葉1キロ1000円でありますと貼っていたのに驚かれて、ご近所さんがやってきました。その梅の葉は、梅畑を持っている方から譲っていただいたものだ。かつちえてに誰か訪ねてきてくれると、たいいてい子どもたちが喜んでくれる。ご近所さんは、私や子どもたちとあれこれ話しながら梅の葉のたまりを一緒にやってくれた。夕食の支度があるからと帰っていった。

この日はちょうど、まちづくりに関心があると、いう若者が東京からやってきて、けんちきと話し込む。その彼に「ねえねえ、どこからきたの?何しにきたの?彼女いるの?」など遠慮なく話しかけている子がいる。そうこうしているうちに、「バイト終わったから今から今から行きます」と、高校生から連絡が入った。バイト先の店長の悪癖や、家や学校のこと、行きたくない塾の話なん